

【研究論文】

連続した造形講座の「あそび」が保育技能と保育指導法に与える効果と影響 ー「岡崎市定期講座講習」の受講と受講後の保育実践を通してー

米窪洋介* 横田典子* 野田美樹* 佐善 圭**

要 旨

本研究は、「平成 29 年度・岡崎市定期講座講習」の造形表現において、考案、実践した造形講座が受講者の造形活動に対する意識にどのような変化を与え、どのような形で受講者の保育実践に生かすことができたのかについて、保育技能と保育指導法に焦点を当てて調査し、本講座の効果を検証することで、今後の保育士研修や保育士養成課程における教科内容の充実に繋げることを目的とした。平成 29 年度は 4 回の連続した造形講座を実施し、本講座の受講者に対して行った質問紙調査と自由記述を分析した。その結果、受講者が造形表現に対して「楽しさ」や「面白さ」を感じ、「保育指導力」に変化を与えた可能性が示唆された。このことから、連続した造形講座が受講者の造形指導の技術を高めたとともに、実践を通して保育の見通しが立てられるようになった様子が窺えた。

キーワード：造形あそび、造形表現、保育実践、定期講習、保育指導法

I. はじめに

「岡崎市定期講座講習」（以下、「定期講習」とする）は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学と連携協定を締結している岡崎市の委託事業として、平成 28 年度より実施している。平成 28 年度は、保育士初任者を対象に 3 つのコース（運動、造形、音楽）をグループごとに 1 回ずつ受講した。平成 29 年度においては、5 つのコース（からだ〈健康・身体表現〉、音楽表現、造形表現、環境、人間関係・言葉）から受講者が選択した 1 つのコースを全 4 回の日程で行った。

定期講習全体の目的は、「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」に基づき、3 年目の保育士研修として、乳幼児の保育の基礎、基本を踏まえ、保育を展開する中で環境としての保育者のあり方、援助等について学ぶことである。これらの目的を達成するために、①保育の展開、②保育の振り返りと再構成、③保育の実践力と意欲向上、の 3 点が目標となった。また、参加者が実際に保育展開したことを見直し、振り返りを行い、見直した保育の実践報告を通して、子どもの理解を深め、保育者の役割を確認するということが、全コー

スの基本的な方針となった。以上のことを踏まえて、定期講習の内容を受講者に周知したのち、希望するコースを受講者が選択する方法で実施された。

全 4 回の定期講習を行うにあたり、造形表現には、4 名の担当教員が配当され、3 名が造形指導担当者、1 名が保育・教育指導担当者として割り振られた。造形表現の分野を担当した筆者らは、保育現場の現状も踏まえながら、3 歳児以上を対象に、造形の「あそび」に着目し、講座内容を考案し、実践した。なお、受講者は、各回の講習受講後に勤務園で学んだことを年齢に合わせて実践し、配布した実践用紙に沿って実践記録をまとめ、次回の講習の始めに発表することで、他の受講者の実践や記録のまとめ方を学ぶ機会とした。

本研究では、今回の定期講習を通した受講者の意識を調査することで、今後の保育士研修および保育士養成課程における教科内容の充実に繋げ、実際に受講者が体験を通して得た学びが、保育の技能や保育の指導法にどのような影響を与えることができたのかということに焦点を当てて、定期講習の効果と影響を検証する。

*岡崎女子短期大学

**岡崎女子大学

Ⅱ. 「岡崎市定期講座講習」の概要

1. 日時及び場所

第1回：平成29年6月23日（金）
第2回：平成29年8月25日（金）
第3回：平成29年10月20日（木）
第4回：平成29年12月15日（金）
時 刻：17:00～19:00
場 所：岡崎女子大学・岡崎女子短期大学

2. 受講者

岡崎市立保育園勤務者（正規3年目）7名
岡崎市私立保育園勤務者（正規3年目）5名
計12名

Ⅲ. 造形講座の概要

1. 造形講座の目的

筆者らは、定期講習を行うにあたり、講座を通して、保育者自身が造形遊びにおける作る楽しさや喜びを感じながら、主体的に取り組むことで、その過程に見られる心身の動きを体感することを造形講座のねらいとした。また、実践を保育内容と結びつけ、様々な遊びを通して自ら経験したような心身の動きを子どもがより主体的に経験することで、子どもの育ちに繋げることができるような保育方法を構築するための工夫を体得することも目的とした。

2. スケジュール

各講習は、表1の通り実施した。

表1 造形講座のスケジュール

回数	期日	内容
第1回	6月23日	講習の説明 「色遊びの展開」 ディスカッション
第2回	8月25日	第1回の実践報告 「絵の具遊びの展開」 ディスカッション
第3回	10月20日	第2回の実践報告 「砂遊びの展開」 ディスカッション
第4回	12月15日	第3回の実践報告 「クレヨン遊びの展開」 まとめ

3. 講座内容

1) 「色遊びの展開」

①題材設定

子どもに豊かな感性と表現する力を育むために、保育者自らが主体的に環境や材料と関わりながら、心を揺さぶられる造形体験を味わうことを第一の目的とし、「色遊びの展開」と題して、通常の液体絵の具をはじめとして、凍らせた氷の固体絵の具、さらに絵の具をゼラチンで固めたゲル状（ゼリー状）絵の具の三種類を使い、色あそびを楽しむ方法や技術を紹介した。

②演習Ⅰ：天ぷら紙の色相環

色の三原色であるイエロー（Yellow）、シアン（Cyan）、マゼンタ（Magenta）の絵の具を使用した。受講者はラミネートされた混色ガイドの上に滴状の絵の具をスポイトで置き、棒で混ぜ合わせることで、三原色から生み出される新たな色やその変化を楽しみながら、色相環を制作した。色相環とは、色を体系化する時に用いる方法の一つであり、今回は、色の分量を変え12色を作成することから、色の仕組みや関係性を容易に把握することができる色あそびである。最終的に混色ガイド上で混ぜ合わせた色相環を作品として絵の具を定着させるために、吸水性の良い不織布の天ぷら紙を絵の具の上にかぶせ、紙に写し取った。

③演習Ⅱ：やわらかい色を味わう

牛乳の空パックに、水と黄、赤、青の食用色素を加えた三色のゼリーを冷蔵庫に準備した。受講者は透明感のあるゼリーの綺麗な色彩を鑑賞するだけでなく、冷えたゼリーに触れてみることで、様々な感覚が刺激される。手で握る、潰すなど徐々に半固形のゲル状のゼリーが細かく混じり合い色が変化する面白さや形の変化を体験した。プラスチックのナイフやスプーン、カップなどを用意し、見立てあそびが展開できる工夫などを紹介した。

④演習：かたい色で描く

三原色の絵の具を凍らせ、球形の氷を受講者に配布した。冷たい感触や紙の上を滑らせることで溶け出し、紙上で自然に色同士が混ざり合う意図しない色の神秘さや画用紙、和紙の2種類の紙を配布することで紙の特性や特徴などを体験した。和紙を電灯や太陽などに向けてかざすと光を透過するため、新たな造形的展開も可能な材料であり、効果も楽しむことができた。



写真1 ゼリーのあそび



写真2 氷のあそび

2)「絵の具遊びの展開」

①題材設定

絵の具は、絵に色をつけるための材料であり、保育現場でもよく用いられる画材のひとつである。同じく絵に色をつけるための材料にはクレヨンやパステルなどがあるが、絵の具の特徴は、スパッタリングやドリッピング、デカルコマニー等に代表されるように水の量、使用する道具、紙、描き方によって多様な表情を描き出すことができるという点であり、描いている自分の行為が変わると、生み出される色や形も変化していく。そして、これらの方法は頭の中にあるイメージを形にすることを楽しむ活動というよりも、自分の行為によって形が現れること、つまり描く過程を楽しむ活動である。

幼稚園教育要領および保育所保育指針の表現の内容の取り扱いには「表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」と示されている。また、平成29年3月に告示された幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の豊かな感性と表現にも「感性を働かせる」「素材の特徴や表現の仕方に気付き」などの言葉があるように、感じる、気付くことなど表現する過程の重要性が示されている。

以上のことから、今回では、この「描く過程を楽しむ」という絵の具あそびの特徴を受講者が体感できるよう、触感あそびとしての絵の具と道具や画面の違いによる表現の変化に焦点をしばらく内容を考案した。

②導入：絵の具あそびについて

まずスライドを用いて造形活動には、素材などに触れることで環境や身近なものを感じたり、見方や感じ方、考え方を広げたりするなど、表現する過程にも大きな意味があることを再確認した。その後、絵の具について混色ができること、水の量や道具、紙、描き方によって多様なあそびができることを説明し、絵の具あそびで活用できる道具や紙の種類を紹介した。

③演習Ⅰ：フィンガーペインティング

絵の具の触感を楽しむことを目的としてフィンガーペインティングを行った。絵の具は、発色がよく、粉の状態からの変化も楽しめる粉絵の具を使用し、始めに糊状にした小麦粉に絵の具を混ぜて色がついていく様子を楽しみ、その後、バットや紙の上で自由に描きながら、色が混ざっていく様子も楽しんだ。その際には、実践に向けて主剤の作り方や絵の保存方法について紹介すると共に、他の絵の具でも代用できることも伝えた。

④演習Ⅱ：様々な道具で大画面に描く

この演習では道具や画面の違いによる表現の変化をテーマとした。紐につるした布、床に置いたサーフェル紙、柱に貼った模造紙の3種類の画面を用意し、道具として、スポンジ刷毛、霧吹き、輪ゴム鉄砲、手筈、ガムテープの芯、ビー玉、緩衝材と巻きダンボールのローラー、たわしを用意した。絵の具はサクラクレパス社の工作用ポスターカラーを用いた。受講者を3つのグループに分け、時間を区切って画面を移動する形で全ての画面を体験できるようにし、制作のきっかけとなるように「うきうき」「ざわざわ」などの擬態語を参加者から提案してもらい、この画面は「○○」と画面に対して設定した。また、受講者には事前に汚れてもよい服装で参加するように連絡し、活動中は思い切り色々なことを試せるようにした。さらに、保育の場面を想定し、全ての画面の周りにはビニールシートを敷き、雑巾やバケツも用意した。



写真3 粉絵の具あそび



写真4 大画面のあそび

3)「砂遊びの展開」

①題材設定

石や砂など自然素材は、園庭のいたるところに存在し、石投げや砂遊びなど日常的に触れる素材の一つである。しかし、身近にある素材でも「あそぶ」とことと「表現する」とことは、必ずしも一致していない場合が多い。そこで、身近にある自然素材を用いて表現するということに焦点をしばらく、

内容を考案した。

②導入：石や砂の種類

本講座で使用する石や砂の種類の説明を行った。今回は、大磯砂利と白玉砂利、珪砂の3種類を用いた。また、石の大きさを示す単位として「尺貫法」についても説明を行い、日本古来の単位についての学びも取り入れた。御伽草子の「一寸法師」の大きさなどに触れることで、日本の単位が身近に使われていることへの理解に繋げた。

③演習Ⅰ：色砂の作り方

珪砂とアクリル絵の具を用いて色砂の制作を行った。透明なポリ袋に、紙コップ1杯分の珪砂を入れ、少しずつ、砂にアクリル絵の具をかける。そして、袋の外からよく手で揉み込み、砂に満遍なく色をつけていく作業を行った。少しずつ色が付いてくるので、好みの色になるまで、絵の具を継ぎ足して今回は終了とした。制作の注意点としては、アクリル絵の具は乾くと樹脂が硬化して硬くなるため、絵の具の量は、砂のサラサラ感がなくなる程度で抑えることも伝えた。また、今回は時間の都合上、色砂を乾燥させることができないため、残りは自宅に持ち帰り、乾燥後にふるいにかけてもらうこととした。

④演習Ⅱ：砂利と色砂を用いた造形遊び

台紙の制作として、ボール紙の上に白または黒の画用紙を、スプレーのりで接着するところから受講者が行なった。今回は白や黒、緑など、いく種類かの色のついた砂利を用いたため、台紙の色や用いる石の色の選択が、出来上がる作品に与える効果についても、受講者が体感することができた。色砂遊びでは、下絵をもとに筆でボンド水を塗った後に、色砂をかけ、画用紙に砂を定着させて、絵を描いた。



写真5 色砂作り



写真6 砂利のあそび

4)「クレヨン遊びの展開」

①題材設定

クレヨンは、顔料と油、ワックスを混合して棒状に固めたものであり、色鉛筆やプラスチック

クレヨンに比べて柔らかいこと、また、伸びもよいことから保育現場では身近な画材のひとつである。一方で、クレヨンの問題としては、重ねておくと色が移り他の作品を汚してしまうこと、折れやすく、使いきれないことが挙げられる。そこで、今回はクレヨンの活用に焦点を絞り、内容を考案した。また、今回が定期講習の最終回となり、実践報告は実施しないため、子どもが行う活動という視点だけでなく、受講者が扱ったことの無いものに触れたときの感動や気づきを体感し、作ることの楽しさを再確認することに講座の主軸を置いた。

②導入：クレヨンについて

まず、クレヨンの成分やオイルパステルとクレヨンの比較、パステル等との違いを説明した。その後、色が移りしにくい保管方法として、木工用のボンドやベビーパウダーなど数種類を紹介し、折れやすく、使いきれなかったクレヨンの活用として下記に示す2つの演習を行った。

③演習Ⅰ：キャンドル制作

クレヨンをロウに混ぜて板状に固めたチップを紙コップにキャンドル芯と一緒に配置し、溶かしたロウを流し込むチップキャンドルの制作を行った。チップは講座時間の関係上、あらかじめ10色ほどを用意したが、チップの作り方や、様々な発展方法も紹介した。

④演習Ⅱ：マーブルクレヨン制作

マーブルクレヨン制作を行った。ここでは、クレヨンの形がブロック状であることや色を混ぜることができる手作りクレヨンの利点を伝えた後、受講者が好みの色や形を選びながら作る過程を楽しむように、様々な色やシリコンの型を用意した。



写真7 キャンドル制作



写真8 マーブルクレヨン制作

4. 勤務先での実践記録

受講者は、第1回～3回の定期講習受講後に実践記録を記入し、次回の講習の際に提出と報告を行った。実践記録用紙は記入する項目を決めており、A3用紙に印刷されたものを毎回配布した。実践記録の内容は以下の通りである。

まず、受講者が経験した「遊び」からの「学び」について受講者自身が体験から感じた(心が揺さぶられた)ことを自由に記入した。感動を子どもに伝えたいと意識してほしいという願いがあった。次に「子どもの育ちに繋げるために」というテーマで、勤務園の環境や担当している子どもの姿を踏まえて、定期講習当日の遊びをどのように保育の中に取り入れることができるか、個人やグループで考え合って記入した。受講会場の造形室は、4名ずつ机を囲んで着席しており、気軽に意見を伝え合うことができた。そして、各勤務園に記録用紙を持ち帰り、保育の中で実践した内容について、今後の指導計画立案時の助けとなるように「子どもの姿」「ねらい」「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助と留意点」「振り返り」の項目に沿って記録し、記録作成を楽しく行うために、自由記述欄を設けて写真添付、図示、メモなどが自由に使えるように工夫した。

実践記録の報告では、提出した記録について、各グループから、各回1名に発表してもらい、記録をOHPで映すことで保育の実践内容や指導法について共有した。受講生からの質問や講師からのアドバイスを受けて、さらにあそびを発展させる方法や子どもの学びについて理解するための材料となった。実践記録の発表については、受講生が必ず1回は経験できるようにした。

また、提出した全員の実践記録は、担当者が講習時間内に受講者の人数分を印刷して配布することで、発表者以外の保育の実践内容について学ぶことができるように配慮した。

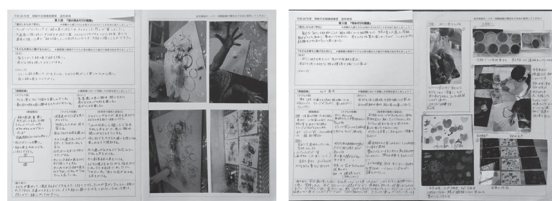


写真9 実践記録①

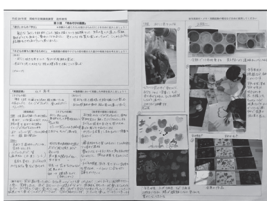


写真10 実践記録②

IV. 研究方法

1. 質問紙調査

定期講習の受講者12名に対して、定期講習の最終回到質問項目と自由記述による質問紙調査を行った。質問項目においては、五件法と複数選択での質問を行い、受講者の意識の変化についての

考察を行った。さらに、自由記述の回答にも考察を行い、定期講習の有意性を検証した。

表2 受講者アンケート項目

Q1	この講座で学んだことは、実際の保育の中で生かすことができましたか？
Q2	受講回数は適切でしたか？
Q3	あなたはこの講習を受けて、何を学び、何が身につきましたか？（複数選択可）
Q4	あなたはこの講座で実践を重ねたことで、受講前と受講後の保育指導力に影響がありましたか？
Q5	あなたが保育を行う上で、できるようになったことはなんですか？（複数回答可）
自由記述	この講座で学んだことを踏まえて、実際に子どもと造形活動を行い得られた成果があれば記述してください。

2. 実践記録

受講者が定期講習での学びを踏まえて、受講後に勤務園で行った活動の「ねらい」、「年齢と活動内容」について、どのような実践が行われたのか、遊びの種類や傾向を調査した。また「保育者の援助と留意点」、「振り返り」についても傾向を読み取り、考察を加える。

V. 結果と考察

1. 質問紙調査

質問紙調査では、質問項目での有効回答が12名であり、自由記述についても12名全員から回答を得た。調査の結果を項目ごとに記述する。

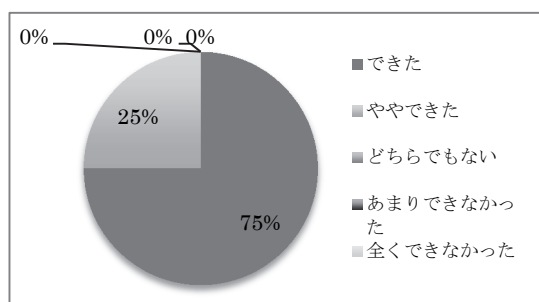


図1 Q1. この講座で学んだことは、実際の保育の中で生かすことができましたか？

この項目については、「できた」と回答した受講者が9名、「ややできた」と回答した受講者が3名であり、肯定回答率が100%であった。このことから、本定期講習が、保育の中で活用されたことが明らかとなった。

平成29年度の「定期講習」造形表現において、保育現場での活用については、筆者らが題材選定を行うにあたり、力を注いだ点でもある。さらに、保育士研修や保育士養成課程における教科内容の充実に繋げる上でも、今回の造形講座を考案した意味は大きいと言える。

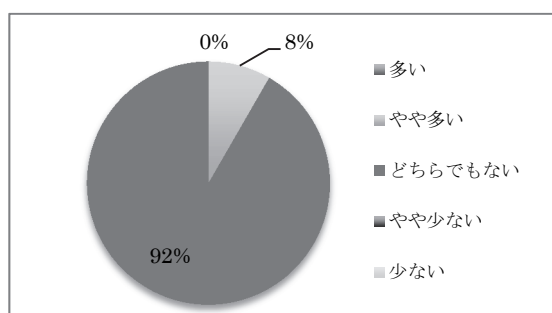


図2 Q2. 受講回数は適切でしたか？

この項目においては、11名が「どちらでもない」と回答し、「やや多い」に1名の回答があった。受講回数は4回であったが、勤務園での保育を行なった夕刻からの研修会であり、受講者にとっては負担も大きいのではないかと懸念があった。

しかし多くの受講者には、適切な回数であったと結果から判断でき、現場での実践も含めて、2ヶ月に1度の研修会が、頻度としては適度な回数であったと言える。

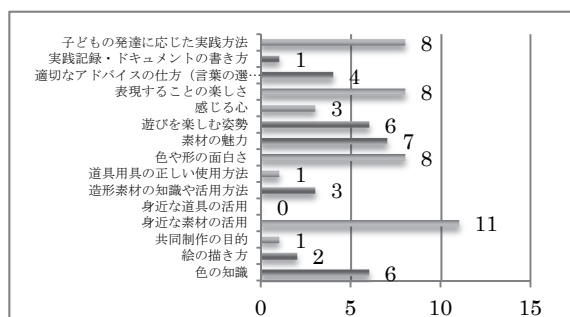


図3 Q3. あなたはこの講習を受けて、何を学び、何が身につきましたか？（複数選択可）

この項目は、複数選択が行える形式で質問を行った。その中で最も多く選択された項目は「身

近な素材の活用」で、11名であった。このことから、今回の定期講習は、勤務園で身近にある素材を用いた内容が多く取り入れられたことを示し、その活用方法を身につけることができたことが一番の成果であったと受講者は判断している。

続いて「色や形の面白さ」や「表現することの楽しさ」に学びを感じた受講者が8名ずつと多い結果となった。よって、定期講座の目的の一つである、自らが作る楽しさや喜びを通して心身の動きを体感するということの達成に繋がったと言える。

また、「子どもの発達に応じた実践方法」と回答した受講者が8名と、上記と同数の人数であった。今回の造形講座は3歳以上を対象としたものの、様々な年齢での実践ができるように乳児から幼児までを対象として、内容を検討したことも理由として考えられる。そのため、同じような表現方法でも、発達に応じて何を行うべきか、子どもの姿に照らし合わせ、活動を考えられる機会となったと推察される。

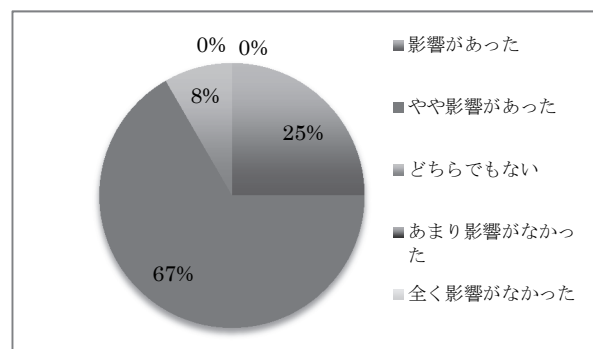


図4 Q4. あなたはこの講座で実践を重ねたことで、受講前と受講後の保育指導力に影響がありましたか？

「影響があった」と回答した受講者が3名、「やや影響があった」と回答した受講者が8名、「どちらでもない」と回答した受講者が1名という結果になった。9割以上の受講者が指導力の変化を実感していることから、3年目の保育士にとって、定期講座を受講することで、保育における指導力の一部に影響を与えることができるという結果が得られた。なお、造形活動における指導力とは一言で言っても多様な要素が必要となる。そのため今回の定期講習が保育の指導力を高める一助となったことが結果から判断できた。

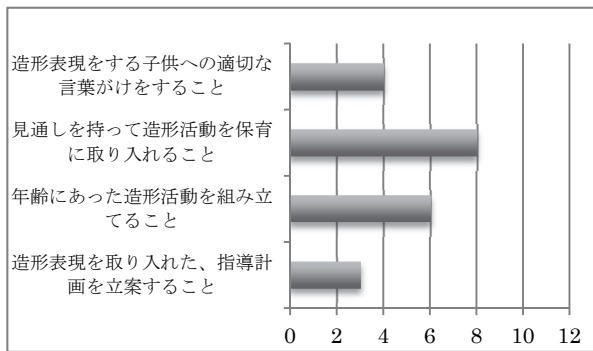


図5 Q5. あなたが保育を行う上で、できるようになったことはなんですか？（複数回答可）

この質問において、最も多くの受講者ができるようになったと回答した項目は、「見通しを持って造形活動を保育に取り入れること」である。自らが定期講習を体験したことにより沸き起こった感情の変化や活動への興味など、イメージを持ちながら保育実践に取り掛かれたことが、活動に対して見通しを持つことができたとの実感に繋がったのではないかと推察される。

2. 自由記述

「この講座で学んだことを踏まえて、実際に子どもと造形活動を行い得られた成果があれば記述してください」の質問には以下の回答が見られた。

- ・普段造形活動に消極的で参加しない子どもたちが、自分から進んで参加し、楽しんで行うことができた。
- ・消極的（造形に対して）になってしまう子がやりたいと積極的に参加する姿が見られた。
- ・製作活動にあまり積極的に参加しない子どもも素材が違うだけで興味を持ち、意欲的に参加することが分かった。
- ・子ども達が「今日は何をするの？」と自分が用意したものに対して興味を持ってくれるようになった。
- ・造形は活動だけでなく、準備の段階で子ども達が興味を持ち、絵の苦手な子も楽しく参加できた。

これらの記述からは、定期講習を受講して、新しい「あそび」の引き出しが増えたことを元に保育を展開したことが、造形活動に対して子どもの興味や関心を惹きつけ、活動に意欲的に取り組もうとする姿勢を養うことに繋がったことが示された。

3. 実践記録

1) 「色遊びの展開」

実際に定期講習で直接体験したこと、感じたことなどをその後の実践に生かすことは、有意義なことであり、受講者としての学びを自らの保育に導入することで、より発展的な保育が可能となる。

本実践は夏季期間であり、季節的に普段の保育環境では扱わない氷や冷えたゼリーを紹介することができた。これらの色あそびは、視覚のみならず、触覚を通して色とあそぶ経験から、色に対する興味、関心がさらに強化されるものである。「活動内容」は、「ゼリー」での実践が5件、「氷」での実践が3件であった。その他も、「にじみ絵」、「吹き流し絵」、「染め紙」、「色水あそび」各1件など、様々な手法による実践を行ったことが分かる。特筆すべきは、どの受講者も定期講習で体験した、赤、青、黄の3色を用い、混色による変化を子ども達が体験する内容であった。また、実践記録から読み取れ、興味深いと感じたのは、全員の「ねらい」の文中に「楽しむ」という語句が記されていたことである。「色の変化を楽しむ」が8件、「感触を楽しむ」が4件であった。これは自らが楽しんだ定期講習の経験を子どもに伝えようとする姿勢だと推察される。

「保育者の援助と留意点」では、「色の変化を楽しむ工夫」を挙げた者が9件あった。定期講習では、球形の氷を提供したが、子どもの描画のために細長いペンのような氷を用意した実践も2件あった。また、絵を描くことに苦手意識を感じる子どもに対しての援助について記述されたものも散見された。

「振り返り」の項目には、0, 1歳児で「ゼリーを冷やしたことで気持ちがよかったのか、ゼリーの袋を体に当てている姿があった」や「初めての遊びで子どもたちは夢中になっていた」、「普段使っている粘土とは触り心地が違い、子ども達もとても楽しそうにしていた」など、新たな材料に触れた子どもの喜びや満足感を記述したものが数多くみられた。

反省点としては、氷の実践で準備に手間取ったり、習字紙を使ったために紙が破れたりしたことが記されていた。また、床や着衣を汚すなどの記述も見られ、配慮する点についても丁寧に説明すべきであったと感じた。

2)「絵の具遊びの展開」

第2回の実践記録の「ねらい」には、「色が混ざる（変化する）様子を楽しむ」など「色」という言葉が見られたものが10件、「感触を楽しむ」が5件、「自由に（自分なりに）描くことを楽しむ」が5件であった。その他、「形を楽しむ」や「様々な道具を使って描くことを楽しむ」など描く過程でのねらいを記載したものが多く見られた。

「活動内容」については身近な道具を使った絵の具あそびが8件、糊状の絵の具を使用したフィンガーペインティングが3件、絵の具そのものを指で描く実践が1件あった。紙の大きさについては、4～8つ切りサイズの実践が10件であったが、模造紙サイズ以上の実践が2件あり、いずれも4、5歳で共同制作を行っていた。また、身近な道具を使用した道具については0、1歳の実践が巻きダンボールを丸めたものやトイレットペーパーの芯などを用いてスタンピングで描いていたのに対し、3歳以上では使用する道具が増え、霧吹きやビー玉、歯ブラシ、ローラーなど道具によって様々な使い方ができるものが用意されており、4、5歳では、8種類もの道具を用意した実践が2件あった。

「保育者の援助と留意点」の項目には、始めに道具の使い方を示す実践はあったものの、保育者がテーマ（描くもの）を決めて取り組んだものは無く、「自由に楽しむことができるように伝える」や「子どもの発見から展開させていく」など子どもが主体的に取り組めるような援助がされていた。

以上のことから、描く過程を楽しむことに焦点を当てた講座を受講した結果、受講者の実践記録における「ねらい」には描く過程の内容を記載したものが多かったこと、「保育所の援助と留意点」ではテーマ（描くもの）を指定した内容が書かれていなかったこと、子どもが主体的に取り組めるような援助をしていたことから、受講者が「子どもが主体的に描き、その過程を楽しむ」ことができるように実践を行ったといえるだろう。また、身近な道具の活用では、受講者が子どもの年齢に合わせて使う道具や使い方を設定していた様子が窺えた。

さらに、「振り返り」の項目には、「いつもとは違うやり方に興味を持っていた」等の記述が複数見られたことから、受講者が本定期講習の受講によって普段は使用していない道具を活用することに繋がったといえるだろう。一方で、最後に画面

の違いによる表現の変化については、大きな画面で実践されたのが2件のみであったこと、ほとんどの紙が画用紙であったことから実践には繋がりにくかったことが明らかとなった。要因としては、スペースの確保など環境に関する配慮が多く必要であることが推測される。

3)「砂遊びの展開」

「ねらい」として取り上げたことは、「色と色の混ざり合いを楽しむ」や「砂の感触や砂の表現を楽しむ」、「自然を感じるや自然に興味を持つ」ということであった。

活動内容については、12名中9名が色砂を用いたあそびを行い、2名が他の自然素材を用いたあそびを行っていた。色砂遊びでは、砂絵として絵や模様を描いた活動が7件、模様としての色付けが1件、色砂を用いた手作り玩具が1件であった。自然素材を用いたあそびでは、落ち葉を用いたあそびとドングリと粘土を組み合わせたあそびが1件ずつ行われていた。

「保育者の援助と留意点」の項目には、色砂を用いたあそびとして、「色砂を使った経験がないため、やり方を具体的に示す」ということが多く挙げられていた。このことは初めて行う造形活動に対して、保育者が配慮すべきだと感じたことが大きな理由だと考えられる。さらには、砂がつにくい状況を説明するなどの留意点を取り上げる記述もあった。

「振り返り」の項目には、色砂あそびを行った受講者9名のうち、5名が「子ども達の方から興味・関心を抱き、やりたいという反応があった。」と記載している。具体的には、砂に色がついていることに感動する子どもや、初めて見るものに不思議な感覚を抱く子どもがいたなどが挙げられた。活動を通しては、砂が混ざり合ったことに「綺麗」という感覚を抱くなど、一つの活動が、子どもたちの感受性に新たな感覚が養われるきっかけになったことが窺える。

以上のことから、身近にある自然素材を用いながらも新たな表現方法を提示することが、子どもの興味・関心を高める上で効果があり、新たな表現の獲得に向けて、活動に意欲的に参加できる姿勢を養うきっかけとなったと言える。

4)「クレヨン遊びの展開」

第4回に行った「クレヨン遊びの展開」は定期講習の最終回であり、実践報告が行えないため実践記録の配布は行わなかった。

5) 実践記録のまとめ

「色遊び」、「絵の具遊び」、「砂遊び」のそれぞれの実践記録から、受講者が体験したあそびを、勤務園において、保育の中で意欲的に実践した様子が窺えた。

受講者自身があそびを体験して、感動した思いを子どもたちに伝えたいと感じるからこそ保育に取り入れていこうとする意欲になっている。初めて見る物や触る物への興味や新しい遊び方やちょっとした工夫で遊びが面白くなることへの関心など、子どもたちがワクワクしてあそびに関わる姿を保育者もワクワクしながら見守っている様子が記録されていた。この保育者の喜びこそ、本定期講習で感じ取って欲しかった保育者のやりがい(意欲)でもある。

しかし、受講者が体験したあそびをそのまま保育に取り入れることはできない。担当する子どもたちの姿を正しく捉え、ねらいをもって関わること。どのような環境構成が必要であるか熟慮すること。子どもの取り組む姿を予想して、援助と留意点を考えておくことなどが保育者として求められている力である。当然、先に指導計画を立案してから、見通しをもって保育を進めていくことも求められるが、今回は、保育後に実践記録を記入することで、記入項目を一つ一つ確認しながら、課題や足りなかったところを見つけていく方法をとった。これは今後の指導計画の立案に役立ってくるであろう。また、振り返りには、あそびに取り組む子どもの様子が丁寧に記されており、上手にではなく、楽しく表現することやあそびの過程を大切にすることなどが記されており、改めて子ども理解を深めていた。子どもの要求に応じてまた遊びたい、さらに、あそびを発展させていきたいなどの意欲的な記述からは、今後保育者自身が子どもにとってより良い環境となっていくことが期待される。実践記録を続けていくことは、計画・実践・評価・改善のサイクルを重ねながら保育する力、つまり、保育指導法を習得していくことに繋がっている。

自由記述欄には、毎回ほとんどの受講者が活動

の様子や制作物や準備した材料などを写真やカットに的確なコメントを付けて紹介しており、ドキュメンテーションにより視覚的に保育を伝え合い、充実した時間や楽しい雰囲気がとてもよく表れていた。誰が見ても分かる実践記録として効果的な手法であり、有効であると感じた。

VI. まとめ

本研究は、定期講習において考案、実践した造形講座が、受講者の造形活動に対する意識にどのような変化を与え、どのような形で受講者の保育実践に生かすことができたのかについて保育技能と保育指導法に焦点を当てて調査し、本定期講習の効果を検証することで、今後の保育士研修および保育士養成課程における教科内容の充実に繋げることを目的とした。

検証の結果、質問紙調査において、本定期講習での学びが、保育の中で生かすことのできる内容であったことと、保育の指導力が高まったことが結果として得られた。このことは、定期講習の内容を考案するにあたり、担当教員間で保育現場の状況などについて共通理解を図ったのちに定期講習を実施したことも結果に繋がった要因であると推察される。

また、受講者が本定期講習から最も学びがあったと回答した項目は、「身近な素材の活用」である。幼稚園教育要領・保育所保育指針の表現には「生活の中で」という言葉が多用されている。受講者自身が定期講習によって体験したことは、普段目にしない素材に興味や関心を駆り立てられたわけではなく、身近にある、子どもたちが生活の中で日常的に関わっている素材に一手間加えて使用する方法や提示の仕方を変えて造形活動をすることで、身近にある素材が、日頃とは違ったものに変化し、子どもの興味や関心を高めることを実感できたからであろう。このことは自由記述からも読み取ることができる。

以上のことから、今回の定期講習を行うにあたり、筆者らが重要視した「受講者自身が体験を通して体感する心身の動き」ということが、保育者の感覚に変化を与え、さらには、保育実践を通して子どもの心に興味や関心を抱かせ、活動への意欲を育むことに繋がった。造形活動の指導では、ものの作り方や描き方を教えることに重きを置き

やすい傾向があるが、定期講習を通して、子どもの心情や意欲に影響を与え、関心を抱くことができる活動を取り入れることの重要性を、多くの受講者が実践から学ぶ機会となったと言えよう。

付記

米窪：第Ⅰ章、Ⅱ章、Ⅲ章 3-3、第Ⅳ章、
第Ⅴ章 3-2、第Ⅵ章

佐善：第Ⅲ章 3-1、第Ⅴ章 3-1

横田：第Ⅲ章 3-2・3-4、第Ⅴ章 3-2・3-4

野田：第Ⅲ章 4、第Ⅴ章 3-5

参考文献

- ・横田典子、佐善圭、米窪洋介、後藤直美（2017）、
「粘土と石膏を用いた造形講座の考案と効果の検証-「岡崎市定期講座講習あそび講座」における実践を通して-」、『地域協働研究』第 3 号、pp.65－75
- ・保育士養成課程等検討会（2010）、『保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）』
- ・厚生労働省『保育所保育指針』（2008）
- ・厚生労働省『保育所保育指針』（2017）
- ・文部科学省『幼稚園教育要領』（2008）
- ・文部科学省『幼稚園教育要領』（2017）

謝辞

本研究の実施にあたり、質問紙調査にご協力をいただきました、保育士の方々、また「岡崎市定期講座講習」運営統括者である岡崎女子大学、大岩みちの先生に深くお礼を申し上げます。